

職員が納得出来る教育の情報化

学校名	津市立倭小学校
-----	---------

所在地	〒515-2623 三重県津市白山町上ノ村183
-----	-----------------------------

ホームページ アドレス	http://www2.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=2410008
----------------	---

1 はじめに

2010年、津市内のすべての学校の普通教室に大型テレビが入った。1人1台パソコンも整備され始めた。そして、各学校に1台の実物投影機も入った。

その4月、津市立倭(やまと)小学校に校長として赴任した。

ICTを使った素晴らしい授業を行うことはさほど難しいことではない。ICT機器とICTが好きな教員がいたら実践を行うことは出来るからだ。

しかし、それは特定のクラスの実践であり、特定の教員の実践という限定したものである。対して、学校全体がICTを活用することは簡単ではない。そのことはこの10年ほどのICTの普及状況を見るとよく分かる。

このように、ICT活用は遅遅としてはいるが、国の政策のためハードの整備は一気に進んできた。追い風である。その風をどう生かすかという課題を持っての赴任であった。

2 学校として「教育の情報化」を進めるために

「情報教育」ということはたびたび耳にする。多くの場合、単にパソコンを使った授業と同意語として使われているようだ。まずは、何のためのICT活用かということを明確にした。

「教育の情報化」の目的は3つあり、①「子どもたちの情報活用能力の育成」、②「各教科等の目標を達成する際に効果的に情報機器を活用すること」、③「校務の情報化—教員の事務負担の軽減と子どもと向き合う時間の確保」(『教育の情報化の手引き』・文部科学省)となっている。

文部科学省がいうところの「教育の情報化」を進めるためには、1人や2人のICTが好きな教員がそのクラスだけで実践を進めることでは達成できるわけではない。どうしても、管理職によるマネジメントが必要である。

倭小学校では校長がリーダーシップをとり、「無理のない教育の情報化」に取り組んだ。校長のリーダーシップとは、トップダウンで強引に進めることではない。職員にとって「無理のない」実践でなければ広がらない。また、職員が納得できるICT活用でなければ本物ではない。管理職が変わればICT機器が使われなくなったということでは、「教育の情報化」が進んだとはいえない。トップダウンとリーダーシップは、マネジメントの観点では別である。

ICTをどのような場面で、どのように使うのかという方針を校長である私が示し、そのためのシステム作りやサポートをすることが、「校長がリーダーシップをとった無理のない教育の情報化」と考えた。実践面は、堀田龍也先生(玉川大学教職大学院教授)の提唱されている、いわば「堀田理論」を学校現場に

下ろすことである。

職員の中にはICTを使わなくてもしっかりした授業ができる人もいる。教室でICTを使った授業のイメージができない人もいる。本校にはICT好きの職員は一人もいなかった。そんな学校でのスタートである。

3 実物投影機の常設化から始める「教育の情報化」

ICTを使って日常の授業を分かりやすくするためには、「ICT機器の使いやすさ」と「いつでも使えること」がポイントである。そのために私たちは「実物投影機を常設すること」を選んだ。その結果、今では(23年12月調査)では、1日の活用回数のクラス平均は2.6回となっている。毎日1回どころではなく、国語や算数では毎時間に近い状態といえる。

校内研修のテーマはICTがらみではない。ICTの研究校でもない。しかし、すべての教員は「分かりやすい授業」をするために努力している。そのためにICTが有効で、かつ使いやすいことが分かれば、自然と授業で使うようになってきた。そして、ある職員は「実物投影機がないと授業ができません」と言うほどである。

写真は、教科書の問題を実物投影機で映し、指さして説明しているところ。黒板には問題の解き方が書かれている。

「大きく映すと子どもたちは分かりやすい」ということが教員の間に浸透してきた結果として、実物投影機を使った授業が日常化した。このことが、子どもたちの学力向上につながると確信している。ポイントは早い時期に実物投影機をすべての教室に常設したことである。



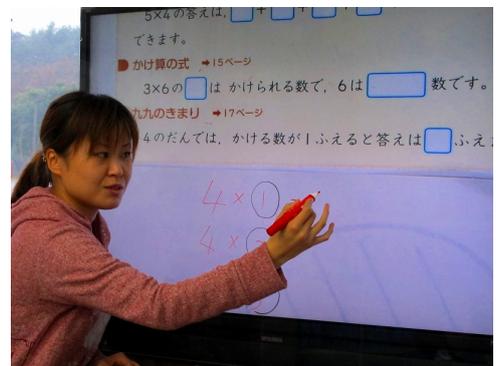
4 大型テレビに書き込む

大型テレビを日常的に使うようになり、時には黒板のような役目を果たすようになってきた。しかし、黒板にはチョークで書けるが、大型テレビには書き込みができない。

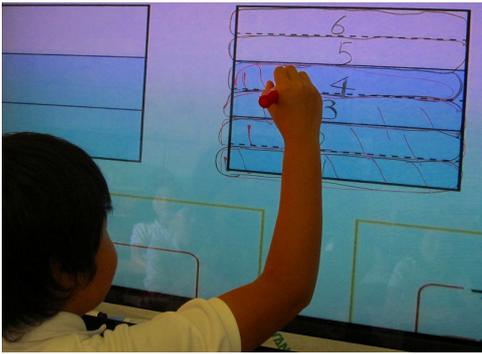
子どもたちに説明しながらの書き込みは理解を大幅に容易にする。なんとかして大型テレビに書き込みが出来ないか調べた。すると、表面に硬質コーティングしてある「書き込みパネル」を大型テレビにつけると、ホワイトボード用ペンで直接書き込みができることが分かった。

23年度、書き込みパネルをすべての教室に設置した。

テレビの画面に直接ペンで書くのはまさに「アナログ」といえる。アナログだからこそ直感的で使いやすく、子どもたちにも分かりやすい。機械操作の研修も不要である(このメリットは非常に大きい)。



写真は子どもたちが書き込みをしているところ。図形の問題を黒板に正確に書くのは困難だ。実物投影機を使って教科書の図を映し、子どもがそこにペンで書きながら



自分の考えを説明する。口頭での説明とは違い、図を使うので説明する児童も、聞く児童も分かりやすい。まさに「一目瞭然」であり、「百聞は一見にしかず」ともいえる。倭小学校のICT活用は「アナログの使いやすさをICTでも」ということにこだわった。

5 豊かな体験活動のためにこそ、ICTを使って分かりやすい説明を



ICTの活用は子どもたちの体験学習を奪うという誤解がある。むしろ逆で、豊かな体験活動を保障するためにこそICTが必要だといえる。

例えば2年生の時計の学習の場合。ICTがないと、教師用の大型の時計を提示して、時間の読み方を指導するのが普通だ。でも、子どもが持っている時計と演示用の時計は大きさなどが異なっているため、理解が十分ではない児童が生じてしまう。

しかし、実物投影機を使って子どもが持っているのと同じ時計を大型テレビに映すと、「時刻の見方」や「時間の進め方」の一斉指導がやりやすい。「指示が通りやすい」ので、子どもたちの理解も進む。答えの

確認も、顔を上げてテレビを見るだけで済む。

ICTを使った練習の後、子どもたち一人ひとりが時計を使って、時刻の問題の出し合いっこをした。これが大事な学習活動である。ICTがないと、子どもたちへの指示が徹底しないので、その後の「時刻問題の出し合い」がスムーズにできない。つまりICTは「子ども同士の問題の出し合い」をしっかりとするための素地作りとしてたいへん有効だといえる。あくまでICTは目的ではなく、分かりやすい指示のためである。

調理実習では切り方の説明を見せてから、子どもたちに作業をさせることがあった。切り方が分かるので、子どもたちは自信を持って包丁を握ることができる。倭小学校では家庭科のような実技教科でもICTは必需品となっている。



6 日常的なプレゼンテーションを鍛える

プレゼンテーションというと、とかく時間をかけて模造紙に書いて、それを見せることが多い。そういった特別なプレゼンテーションではなく、日常的なプレゼンテーションが必要だ。日常的であるからこそ準備には時間をかけることはない。しかし、日々の授業で頻繁に行う。そして、子どもたちがプレゼンテーションの本質を学び、力をつけていく、そんなことが大事だと考えている。いわば「見せるため」のプ

プレゼンテーションではなく、子どもたちに経験を積ませるために行うものとして実践を進めてきた。

写真は算数の時間に自分のノートや教科書を使って解き方の説明をしているところ。大事なところを差して説明している。こうすることで、説明のポイントが明確になる。

今日、「伝え合う力」が重視されている。日常的な学習を通して、プレゼンテーションにつながる力を培わせたい。新学習指導要領になり、教科書が分厚くなり、指導内容が増えた。模造紙に書かせる時間はとりにくい。だからこそ日常的なプレゼンテーションが必要である。



子どもたちのプレゼンテーション能力は、教師の一斉指導の様子を見てそこから自然に学ぶことがあることも分かってきた。たとえば、教えていないのに実物投影機のズーム機能を使うこともあった。教師が使っているのを見て、「これは便利で分かりやすい」と思ったのだろう。だから、自分が実物投影機を使って説明するとき、ズームの使い方の指導を受けていないのにその機能を使いこなす児童が出てきた。使いやすいICT機器とはこういうものだと思う。

7 フラッシュ型教材で学力をピンポイントで鍛える

学校教育は多岐にわたる課題を抱え、それに精一杯対応している。そんな中でも特に大切なことは「読み書き計算」といえる。これは寺子屋以来の日本の教育の基盤となっている内容だ。

基礎基本の一つに計算がある。足し算や引き算、そしてかけ算。習得に必要な時間は子ども一人ひとり異なってはいるが、基本的には繰り返す「反復学習」が必要である。

繰り返しの「反復習熟学習」のために教師はいろんな手を使う。声に出したり、書いたり、カードを使ったり。子どもたちの興味を引きつけながらの反復練習の指導を行っている。

その時に非常に有効なのが、「フラッシュ型教材」(チェル)である。パソコンを使ったカード提示といえる。スピードやリズムがあるので、子どもたちは集中しやすい。

教師が「(間隔が)3秒?、それとも2秒?」と子どもたちを少し挑発すると、子どもたちの意欲が喚起される。慣れると、1秒間隔でランダムに表示される九九の問題に挑戦することもあった。

また、フラッシュ型教材は一人ずつではなく全員で声を出すので、苦手な問題があってもみんなと一緒に答えることが出来る。そして、2回目、3回目となると、覚えてしまうようになる。つまり、苦手な子にも優しいシステムといえる。

教師の準備も楽だ。

フラッシュ型教材はパソコンを使わなければならないので、実物投影機よりはやや敷居は高い。しかし、子どもたちの学力をピンポイントで鍛えるということでは非常に効果が上がる指導方法である。たった5分程度の「フラッシュ型教材」の学習ではあるが、価値のある5分といえる。

8 通知表作成ソフトの導入

ここまでは授業におけるICT活用を取り上げてきた。

校務におけるICT活用としては、通知表作成ソフト(スズキ教育ソフト)を導入した。5月に研修会を行い、7月には1学期の通知表作成をパソコンで行った。校務の情報化の切り札といえる。

一人一台パソコンを使ったグループウェアをあまり使おうとしなかった職員が、通知表作成ソフトには飛びついた。2回の研修会だけですぐに使えるようになった。通知表は定型化できるところが多いのでパソコンに任せやすい。エクセルのマクロで組むのとは違い、専用ソフトははるかに使いやすく、安定している。

その結果、時間にゆとりができ、子どもと向き合うための時間がより多く確保できるようになってきた。また多忙感の解消にもなっている。職員には非常に好評だ。

さらに個人情報の流出の危険もほとんどない。保護者も違和感なく受け入れてくれた。

9 校長としてのリーダーシップ

冒頭にトップダウンとリーダーシップは違うと書いた。通知表ソフトの導入はトップダウンが必要である。「私にも使えるだろうか」といった職員間の議論にまかせるのではなく、良い物は導入するという方向付けを管理職が行う。そのための予算確保も管理職の仕事の一つである(パナソニック教育財団の助成金を活用した)。

しかし、授業におけるICT活用はトップダウンでは無理がある。研究授業とか参観日といった特別な場合しか使わないという「ゆがみ」が生じやすい。「これは便利だ」と職員が思う環境を作ることが管理職の仕事である。そのために、電子黒板ではなく実物投影機をすべての教室に常設した。「使ってください」とはいわなかったが、使い方の研修会を放課後、2回行った。その後は、実物投影機を使っているクラスの様子を、「学校便り」や「学校HP」に頻繁に取り上げた。「こんなふうに使ったらいい」ということを知ってもらうためである。また、子どもたちに背を向け大型テレビの方ばかり見ることがないようにするとか、指差すとかいった、不易の指導技術も、何度も学校便りなどで話題にした。いわばOJTといえよう。

そんなことのくり返しで、今では1日に2.6回もICTを使うようになってきた。

校長の仕事としては、すべての教室に実物投影機を常設して使いやすい環境を整えたこと、一気に通知表作成ソフトの導入を決め、メーカーから一流のインストラクターを呼んで研修会を行ったことが主なことで、「ICTをぜひ使ってほしい」という音頭をとったことは一度もない。管理職のマネジメントというのはいくつかのことだと私は思う。

10 終わりに

私はこの3月で定年退職することになっている。定年になることが分かっている中で取り組んだ「教育の情報化」。ICT活用に他の職員よりは経験の多い私の退職後、倭小学校の「教育の情報化」が停滞することがあってはならない。そのためには誰でもが可能なICT活用ということを念頭に置いて実践を進めてきた。

今では倭小学校におけるICT活用は授業のインフラ(社会基盤)となっており、教室に大型テレビや実物投影機が置いてあって当たり前と職員は受け止めている。

ICTが授業をしてくれるわけではない。ICTの活用が進むことで、発問や指示の大切さが際立ってきた。授業作りこそが、学力の基盤であることが再確認できた。そのために、野口芳宏先生をお招きして授業と講演をしていただいた。ICTを使った授業ではないが、教育の情報化のねらいの一つは子どもの学力形成である。野口先生の授業を見て、国語科における学力について学んだ。

とかく I C T というと、機器の操作研修が必要である。しかし、倭小学校では放課後、短時間行っただけである。むしろ授業の中でどんな場面でどのように使うのかということ、学校便りなどで共有化した。その仕組みを作れるのは日々の授業を自由に見て回れる管理職である。

1年間の研究成果の一端は「『教育の情報化』を進めると、学校は変わる」という、A4サイズ6ページのカラーリーフレットにまとめた。そして、津市内のすべての小・中学校などに配布した。書き込みパネルのことなどで数校から問い合わせがあるなど、反響もあった。

本校の研究成果が津市内の学校に少しでも共有してもらえるところがあれば、とてもうれしい。また、学校便りにおける I C T 活用に関するものを電子ブック形式にして H P で公開した（24年3月末まで）。